

# 実践と内省を結びつけるチューター育成プログラムの開発

渡邊 浩之<sup>\*,\*\*</sup>, 鈴木 克明<sup>\*</sup>, 戸田 真志<sup>\*</sup>, 合田 美子<sup>\*</sup>

## Development of Tutor Training Program to Link Practice and Reflection

Hiroyuki WATANABE<sup>\*,\*\*</sup>, Katsuaki SUZUKI<sup>\*</sup>, Masashi TODA<sup>\*</sup>, Yoshiko GODA<sup>\*</sup>

### 1. はじめに

本研究の全体の主題は、「学生チューターの質の保証を行うためのツールの作成と評価」である。最初に筆者らは、初心者学生チューター（以下「チューター」という）向けのチュータリングガイドライン（以下「ガイドライン」という）を開発し、その評価過程のなかで、チューターの質を保証する可能性を探った。その結果、ガイドラインを意識することで、回を重ねるごとにガイドラインに従ったチュータリングができるようになることがわかった<sup>(1)</sup>。

ガイドラインには、チュータリングの基礎的項目である、チュータリングの定義、やるべきこと・やるべきでないこと、倫理、学習環境などの記述があり、専門科目に関する内容は含まれない。実施校である地方A大学の法学部では、これを補うために専門講師による科目の研修（民法や憲法等）を行っていた<sup>(2)</sup>。一方、ガイドラインに詳しい記述がないコミュニケーション、傾聴、挨拶などにかかわる研修を行うことは、時間的な余裕がなかった。それは、チューターの中心が学部生（2年生と3年生）であり、履修科目も多いため研修時間の確保が難しかったからである。

これ以外にも、プログラム全体でチューターの成長を支援する仕組みがないことが課題として挙げられた。そこで、事前の練習を含む活動時期全体（学期の前後と途中）を通して、チューターを育成する仕組みを開発して実施することにした。

本稿では、育成する仕組みの一つとして、事前練習

ができるオンライントレーニング教材の開発と評価に焦点を絞った報告を行う。この仕組みでは、実践で得られたことを活かすということを主眼に置いたので、チューターは、現場での練習と実践の様子をリフレクションという形で報告する。これは、一種のブレンディッドラーニングである。ブレンディッドラーニングの定義について、バーシンは「特定の顧客に対して最適のトレーニングプログラムを作り出すために、異なるトレーニングの『メディア』（技術、活動、事象の種類）を組み合わせること<sup>(3)</sup>」としている。さらに、実践とリフレクションを繰り返すということで、Kolbの経験学習サイクル<sup>(4)</sup>を適用した。

### 2. 先行研究

チュータートレーニングの要素としては、すでに北米のCRLA<sup>(5)</sup>において認定されるための要件としてITTPCのRegularモデルで「チュータリングの定義とチューターの責任、チュータリングガイドラインの基礎（やるべきことと禁止事項）、チューターセッションのうまい始め方と終わり方の技法、成人学習者・学習理論・学習スタイル、アサーティブネス・困難な学習者の扱い方、ロールモデリング、ゴール設定・計画、コミュニケーションスキル、積極的傾聴と言ひ換え、スタディスキル、クリティカルシンキングスキル、チューター制度の倫理と哲学遵守・セクハラ・剽窃、問題解決モデリング、その他<sup>(6)</sup>」などが挙げられている。これらの要素は、前述のA大学法学部で

\* 熊本大学大学院教授システム学専攻（Kumamoto University Graduate School of Instructional Systems）

\*\* 西南学院大学（Seinan Gakuin University）

受付日：2019年1月28日；再受付日：2019年4月12日；採録日：2019年5月21日